

令和元年6月25日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12276

研究課題名(和文) 地域で生活する精神障害者とその家族のリカバリーを支える心理教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a psycho-education program to support the recovery of mentally ill people and their families living in the community

研究代表者

内山 繁樹 (uchiyama, shigeki)

関東学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：80369404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、統合失調症の当事者とその家族を共に支援するリカバリー志向の心理教育による効果の持続性要素を明らかにし、両者に与える変化と実践の有用性を検討することである。GAF、PAM13-MH、LSSについて、IMR施行終了直後および2年後以上の各平均値は施行前に比べて有意に改善しており、IMRによる効果が持続している可能性がみられた。また、家族は、IMRに参加する当事者の姿勢や対処を考える取り組み等から、変化を実感できるようになり、当事者の生きる力を信じられるようになった。また、希望を持つ感覚を得られることは、前向きに楽観的に考えられるようになり、生活での変化を感じられるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リカバリー志向の心理教育は、家族は、当事者の変化を感じながら、当事者との関わりを積み重ねることを大事にし、当事者の生きる力を信じように変化している。また、家族自身がリカバリーを意識することは、家族自身の心の変化を実感することにつながっていた。そして、両者にとってリカバリーが共通言語になり、希望を持つことを実感できるようになる。また家族は、当事者のリカバリーのプロセスに直面する経験は、共に希望を持つ感覚が得られ、それぞれが生活での変化を感じられるようになることは、リカバリーの促進につながる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the sustainability of the effects of recovery-oriented psychoeducation that supports both schizophrenics and their families, and to examine the usefulness of changes and practices given both. As for GAF, PAM13-MH, and LSS, the mean values immediately after and two years after the end of IMR were significantly improved compared to before the operation, and it is possible that the effects of IMR may be sustained. In addition, the family became able to feel the change from the attitudes of the parties participating in the IMR and the efforts to consider the actions, etc., and became able to believe in the power of the parties. In addition, being able to get a sense of having hope became positively optimistic and became able to feel changes in life.

研究分野：精神看護学

キーワード：リカバリー 心理教育 統合失調症 IMR

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

統合失調症を中心とする重い精神障害の効果的な治療は、薬物療法が主体ではなく、当事者がリカバリー体験とともに疾病を自己管理する技術の習得であり、その家族も疾病理解、家族機能と社会的不利の改善にリカバリー志向の心理教育の効果が期待されている。

我が国の精神保健福祉施策は、「入院医療中心から地域生活中心」(厚労省, 2004)へとパラダイムシフトしつつある。精神疾患は、疾患による負担が大きく QOL の低下をもたらし、症状改善や認知機能回復に重点を置いた治療や支援など臨床的回復が中心に行われてきている。しかし、このような従来の支援は、入院施設から地域へと退院支援の潮流のなかで、主体である精神障害者(以後、当事者)の希望やストレングスなどの力量に焦点を置きリカバリー志向の支援の必要性(野中, 2011; 伊藤, 2016)が指摘されている。

IMR(疾病管理とリカバリー: Illness Management and Recovery, 以後 IMR)は、精神疾患などの疾病に適切に対処し、病気に苦しむ人たちが自身が望む「リカバリー(回復)」の実現をめざした実践プログラムである。これは、自身にとって意味ある目標を設定した上で、その達成を目指しながら疾病自己管理の知識とスキルを獲得するための EBP(Evidence Based Practices: 以後 EBP)に基づく心理教育プログラムである。IMRは、当事者の生きる力のエンパワメントや入院に至らない再発防止、夢や希望につながる自己実現など自身が求める生き方を主体的に追求するプロセスを促進する(内山ら 2015, 2014)ことが得られている。しかし、IMR 終了後に IMR による持続性がどうかについては、先行研究が極めて少ない。

一方、家族の誰か1人が精神的トラブルを抱えたり問題行動を起こしたときは、家族という社会ネットワークで大きな変化が起こっている。我が国の精神障害者は家族との同居率が 75~81%(厚労省, 2016)と高く、EE 研究からも FPE(家族心理教育: Family Psycho-Education)はその有効性も実証され統合失調症の標準的な治療として家族に広く提供することが推奨されている(Lefman ら, 1998, 2004)。しかし FPE の実施率は国内外とも 10~30%と低く、ニーズを持つ家族に十分に提供されていない状況(Oshima, 2007)であり、家族心理教育の研究成果も散見する。FPEは、家族の生活困難の軽減や精神健康の向上、家族協力行動の増加、家族のケア意識の改善と家族が自由に使える時間が増加するなど負担感を軽減しストレスを緩和しようとするニーズに貢献(内山, 2014, 2015)できていた。

しかし、IMRは、あくまで当事者向けの心理教育であり、家族を対象にはしていない。同じく FPEは、家族向けの心理教育であり当事者を対象にしていない。現在、日本においては、当事者とその家族を共に支援する心理教育がほとんどなく、心理教育に対する両者のニーズも高い(内山ら, 2015)。また、それぞれのリカバリーが増加しているとは断言できず(池淵, 2017)、本人とその家族の両者を支えるリカバリー志向の家族支援(佐藤, 2017, 野中, 2014)が期待されている。

そこで研究者らは、IMRは家族が不在になり、FPEは本人が不在になり、共に生活している相互の関係にエンパワメントが得られにくい現状から、本人とその家族の両者を共に支える家族支援がないことに着目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域生活支援である統合失調症とその家族を共に支援するリカバリー志向の心理教育に向けて IMR と FPE の効果の持続性要素を明らかにし、両者に与える変化と実践の有用性を検討する。

3. 研究の方法

1) IMR 終了後の持続性の検討

2014年3月までに IMR をすべて終了し、データ解析が可能な当事者 23 名のうち IMR 終了後 2 年以上経て評価が可能だった 15 名(7 名は転居、未連絡等)を対象とした。対象者(男性 6 名、女性 9 名)は、統合失調症 13 名、うつ病 2 名であり、IMR 開始時の平均年齢は 30.5±8.8 歳、発症年齢は 21.1±9.0 歳であった。

IMR 実施前、実施終了直後と同じ評価尺度を用いて実施後 2 年以上後において調査を行った。評価調査は、BPRS(簡易精神症状評価尺度)(n=15)、GAF(機能の全体的評定尺度)(n=15)、PAM13-MH(精神の健康管理への積極性評価尺度日本語版)(n=14)、SECL(地域生活に対する自己効力感尺度)(n=14)、LSS(生活満足度スケール)(n=12)を用いて各時点での評価を実施した。IMR 施行前と施行終了直後および施行後 2 年後以上について、各評価尺度の平均値の差について統計学的分析を行った。

2) 当事者およびその家族へのインタビュー

- 1) 研究デザイン: 縦断的介入による評価研究
- 2) 対象: 通所をしている 20 歳以上の統合失調症をもつ当事者 3 名、その同居家族 3 名。
なお、本人および家族とも病名告知をされている。
- 3) 調査期間: 2018 年 5 月 より 2019 年 3 月末日まで
- 4) データ収集
(1) IMR および FPE プログラムの実施頻度、回数

IMR：90分/1回/週，計28回（全プログラム終了後の1ヶ月後，2ヶ月後にフォローアップを実施）

FPE：3時間/1回/月，計8回

(2)プログラムの進め方（表1，表2）

開催日	場所 時間	主な内容	実施回数	
毎週 (土曜日)	デイ・ケア ルーム 10:30 12:00	初回オリエンテーション	1) 開催の挨拶、セッションへの参加、アンケート等の承諾確認 2) スタッフ、当事者の自己紹介 3) IMR全体のオリエンテーション：意義と目的、進行方法など 相互にプライバシーを尊重することの確認など 4) プログラム実施前アンケート調査	1
		コア セッション	1. リカバリー(回復)の方法	3
			2. ストレス-脆弱性モデルと支援方法	3
			3. ストレスへの対処	3
		病気、治療 セッション	4. 病気に関する具体的な事柄 5. 薬物治療の効果的使用	3 3
再発防止 対処、社会 セッション	6. 再発を減らす 7. 続いている問題や治りにくい症状への対処 8. 社会の中で支えを作る	3 3 3		
最終回	プログラム終了後のアンケート調査	1		

開催日	場所 時間	主な内容
第1回	デイ・ケア ルーム 13:00 16:00	1. 開催の挨拶、セッションへの参加、アンケート等の承諾確認 2. スタッフの自己紹介 3. 家族の自己紹介(患者の経過、家族のかかりなど) 4. 家族教育全体のオリエンテーション：意義と目的、進行方法などの説明 相互にプライバシーを尊重することの確認など 5. 導入/講義：統合失調症の概念、症状、原因、経過
第2回		1. 急性期をどのように乗り越えるか 2. 家族心理教育GW
第3回		1. 回復に向けた精神障害のプロセス 2. 家族心理教育GW
第4回		1. その人らしい生活を実現するために—統合失調症の再発兆候と予防— 2. 家族心理教育GW
第5回		1. 生活障害を改善するためのリハビリテーション方法とその効果 2. 家族心理教育GW
第6回		1. 家族間のコミュニケーション、接し方、問題解決法 2. 家族心理教育GW
第7回		1. 利用できる社会資源とリハビリテーション目標 2. 家族心理教育GW
第8回		1. 総合討議：参加者が各自の悩みを出し合い、問題解決を図り相互交流を深める 2. まとめ：参加者の感想と今後について

(3) 半構造的インタビュー（IMR，FPE それぞれに全プログラム終了時）の実施

(4) IMR プログラム各回実施後に調査アンケートの実施

IMR 調査アンケート：自記式の「リカバリーゴール(目標)に向けての取り組みについて」

- 3) データ分析方法：IMRにおける半構造的インタビューおよび自記式調査アンケートは、リカバリーとそのプロセス、家族に関する内容にそって質的帰納的に分析した。FPEにおける半構造的インタビューは、リカバリー、当事者に関する内容にそって質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

1) IMR 終了後の持続性の検討

	n	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
BPRS	15	33.9 (8.96)	25.6 ** (4.97)	32.0 (11.5)
GAF	15	41.7 (11.5)	53.7 ** (7.9)	52.4 * (14.2)
PAM13	14	46.3 (8.91)	59.6 ** (11.8)	55.9 * (12.6)
SECL	14	133.6 (19.7)	142.2 (24.2)	138.1 (28.3)
LSS	12	10.6 (32.3)	32.7 ** (35.7)	32.3 * (26.8)

GAF，PAM13-MH，LSS について，IMR 施行終了直後および2年後以上の各平均値は施行

前に比べて有意に改善しており、IMR による効果が持続している可能性がみられる。一方、BPRS については、IMR 施行終了直後に有意な改善があったが、2 年後には施行前と有意差はなく、SECL 総得点については、終了直後も 2 年後も有意な改善はなかった。BPRS については、IMR の効果が持続しにくく、SECL 総得点については IMR による効果は生じにくいことが示唆された。本研究の限界として、対照群の設定がないこと、IMR 以外の要因による可能性が挙げられる。

2) リカバリー志向の心理教育による変化

IMR インタビューおよび調査アンケートを分析した結果【自分を認めることができる】【仲間の存在】、【希望を持てる】、【家族との関わりを工夫する】の категория が得られた。リカバリーゴールをたてスモールステップへの取り組みとプログラムの中で自身の思いを言語化し共有することは、【自分を認めることができる】こと、【仲間の存在】により自分だけではないという安心と自信に繋がり、【希望を持てる】ように変化したものと考えられる。そして FPE に参加する家族との会話が増え、【家族との関わりを工夫する】変化へと繋がっていた。

FPE インタビュー内容を分析した結果、【積み重ねる当事者との関わり】、【当事者の生きる力を信じる】、【家族自身の心の変化を実感する】、【リカバリーが共通言語】、【希望を持つ重要性】の categoria が得られた。FPE プログラムでのリカバリーや疾病についての学びと共に、IMR に参加する当事者の変化を感じ、【積み重ねる当事者との関わり】を大事にし、【当事者の生きる力を信じる】ように変化したと考える。家族自身のリカバリーを意識することで、【家族自身の心の変化を実感する】ことに繋がっていた。そして【リカバリーが共通言語】と考え、【希望を持つ重要性】を実感するようになったと考えられる。

当事者と家族ともに、希望を持つ感覚を得てお互いを意識しそれぞれに生活での変化を感じていることから、それぞれにリカバリーの促進に繋がったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 内山繁樹, 相澤和美.(査読無) 特別記事 精神看護への「開かれた対話(オープンダイアログ)」の有用性 ケロプダス病院を視察して, 精神科看護 2018; 45: 8: 42-49.

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 内山繁樹, 藤田恵美, 渡辺厚彦, 岸貴雅, 池田直矢, 古屋喜代子: Illness Management and Recovery: 疾病管理とリカバリー - IMR とリカバリー, 日本精神障害者リハビリテーション学会第 26 回東京大会, 2018.12.14, 東京

2. 内山繁樹, 塚田尚子, 永瀬誠: IMR2018 ~いまから, みんなでリカバリー~ 地域生活支援センターにおける IMR 実践とリカバリー, リカバリー全国フォーラム 2018, 分科会 9, 2019.9.16. 東京

3. 内山繁樹: リカバリーを志向する地域・社会的連携の形成と発展 - IMR " 疾病管理とリカバリー " の可能性, リカバリー全国フォーラム 2017, 2017.8.26 東京

4. 内山繁樹, 中村正子, 古屋喜代子: はじめよう! IMR (疾病管理とリカバリー) IMR とリカバリー, 第 43 回日本精神科看護学術集会 in 名古屋, 2017.6.16. 名古屋

〔図書〕(計 1 件)

大島巖, 加藤大慈監修, 内山繁樹(分担): IMR の実践 一人ひとりのカバリーのために, 家族心理教育との連携, 地域精神保健福祉機構・コンボ, 145-155, 2016.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：馬場 薫
ローマ字氏名：baba kaoru
所属研究機関名：関東学院大学
部局名：看護学部
職名：講師
研究者番号（8桁）：70442077

研究分担者氏名：栗城 尚之
ローマ字氏名：kuriki takayuki
所属研究機関名：関東学院大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8桁）：90786344

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。